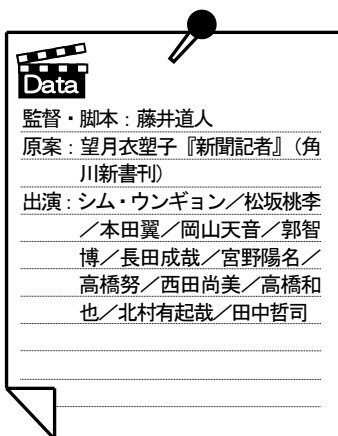




👁️👁️ みどころ

民主主義国でも政治の闇は多いはず。そのため、松本清張が描いた数々の政治ドラマ、社会派ミステリーは面白かった。しかし、政治と民主主義が劣化し、官邸主導が強まり、忖度政治が強まった昨今、そんな傑作の登場は望むべくもない。また、アメリカでは『大統領の陰謀』『スポットライト 世紀のスcoop』『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』『記者たち 衝撃の畏怖と真実』等の「記者もの」の名作が多いが、日本では所詮ムリ！

そう思っていたが、東京新聞の望月衣塑子記者が書いた『新聞記者』を原案とした本作は？その切り口は、モリカケ問題と同じ特区における医療系大学の新設。主人公は、それを取材する新聞記者と内閣情報調査室（内調）に勤務する中央官僚だ。その接点は如何に？そして、ある日東都新聞の一面トップを飾った驚愕の記事とは？

「これヤバイですよ」と言われながらの映画化と問題提起に拍手！久々の社会派ミステリーの本作は、こりゃ必見！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□■邦画にも本格的『記者たち』が登場！■□■

2019 年 4 月イチオシの話題作は、『記者たち 衝撃と畏怖の真実』（17 年）だった。『記者たち』というタイトルだけでは何もわからないが、同作はナイト・リッター社という名もなき地方新聞の 2 人の記者を主人公にした映画で、彼らは何ともしごいことをやっていた。“自由と民主主義の国” アメリカでは、権力と対峙する新聞記者や新聞社をテーマにした名作が多い。古くは、①ニクソン政権下におけるウォーターゲート事件を暴いた

ワシントン・ポスト紙の2人の記者たちを主人公にした『大統領の陰謀』（76年）、近時は、②ボストンのゲーガンという神父が、30年の間に80人もの児童に性的虐待を加えたという「ゲーガン事件」を「深掘り」し、公表したボストン・グローブ紙の記者たちを主人公にした『スポットライト 世紀のスcoop』（15年）（『シネマ 38』48頁）や、③ペンタゴン・ペーパーズ事件を徹底的に追及するワシントン・ポスト紙の記者たちの活躍を描いた『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（17年）（『シネマ 41』37頁）等の名作がある。

ところが、邦画では、かつては『金環蝕』（75年）等のその手の名作があったが、近時の邦画では皆無という状態になっていた。そんな中、タイトルもズバリ直球勝負の『新聞記者』にした本格的『記者たち』が邦画にも登場！もっとも、『記者たち』と同じように、『新聞記者』だけでは何のことかサッパリ分らない。タイトルになっている「新聞記者」とは、一体どこの誰？

■東京新聞の望月衣塑子記者の小説を原案に■

アメリカでは米中貿易摩擦の解消、メキシコの壁建設等々を巡って、いたるところで“トランプ節”が炸裂している。6月28日～29日に大阪で開催されたG20サミットでのトランプ大統領は少し上品（？）だったが、その直後、南北朝鮮の境界線上にある板門店に飛び、米朝首脳会談をやったのけた早ワザはさすが！アメリカ大統領選に向けたパフォーマンスに過ぎないとの批判も強いが、72歳にしてこれだけの行動力には感心。また、さすがビジネスマンと感心させられる。そのトランプ大統領の最大の親友になっているのが日本の安倍晋三首相だが、東京新聞の望月記者はモリカケ問題や辺野古移設問題などを巡って、常に第一線で政権に疑問を投げかけ、官邸での菅官房長官の記者会見でも常に鋭い質問を投げかけているらしい。そんな彼女の問題意識をまとめたベストセラー小説が『新聞記者』だが、それを原案とし、そこに映画の“強み”であるフィクションを最大限に駆使して完成させたのが本作だ。

松本清張が描いたかつての数多くの社会派ドラマは深みと重みがあったが、1975年生まれの現役の新聞記者である望月衣塑子が書いた『新聞記者』はどうせ薄っぺらいものだろう、私はそう考えていたが、何の何の。国家戦略特区内での医学系新大学建設の認可における首相の権限と官僚の忖度。そんな“モリカケ問題”に絡んで言い尽くされた論点も登場してくるが、それだけに留まらない脚本は立派なものだ。『記者たち』では、ニューヨーク・タイムズもワシントン・ポストも「イランは大量破壊兵器を持っている」というフェイクニュースに染まってしまう中、ただ一社だけそれに疑いをもち、世の中に真実を伝えることに執念を燃やしたナイト・リッター社の2人の記者たちが主人公だったが、さて、本作の主人公として登場する東都新聞の社会部記者・吉岡エリカ（シム・ウンギョン）は何に執念を？そしてまた、どんな記事を？

■□■外務省から内調へ出向？そんなのあり？どんな仕事を？■□■

『娼年』（18年）では、体を張って男娼婦役を（『シネマ 42』未掲載）、『孤狼の血』（18年）では、役所広司扮する先輩刑事にこき使われる若手刑事役を（『シネマ 42』33頁）熱演した、今が旬の俳優・松坂桃李が、本作ではエリート中央官僚の杉原拓海役に挑んでいる。かつての大蔵省の中央官僚といえば、『金融腐蝕列島』（99年）で描かれていたような、“ノーパンしゃぶしゃぶ”の接待を連日受ける「MOF 担」の“偉そうな奴”が多かったが、杉原拓海を見ると、今どきの中央官僚はかなり上品だ。私生活でも妻の杉原奈津実（本田翼）と共に住むマンションはそれなりに立派だが、仕事熱心で接待責けのようなことはならしい。まあ、大蔵省（現財務省）や経済産業省に比べれば、外務省はもともと接待は少ないだろうし、外務省から内閣情報調査室（内調）に出向すれば、接待は更に少なくなるはずだ。

内閣情報調査室は「日本版 CIA 構想」から生まれたものだが、「内閣総理大臣官房調査室」や法務省の外局として設置された「法務府特別審査局」は生まれたものの、CIA のような大規模な中央情報機関は日本では生まれなかった。現在、内調の内閣情報集約センターは大規模災害など緊急事態における情報の集約を行う組織として有名（？）だが、それ以外の部門が、何のためにどんなことをしているのかは基本的にヒ・ミ・ツ。もちろん、そこには国内部門だけでなく国際部門もあるから、外務省からの出向組もいる。すると、杉原の仕事はアメリカのCIAやイギリスのMI6のような国際的な諜報活動を？007のジェームス・ボンドのような“殺しのライセンス”は持っていないだろうが、もしそんな仕事をしているとしたら、そりゃすごい。

そう思っていると、意外にも本作冒頭にみる杉原の仕事は、文科省元トップによる女性スキャンダルに関するもの。果たして、この女性スキャンダルは本当なの？それとも、これは内調によるインチキ情報を含むマスコミ操作によるものなの？もし、外務省から内調に出向して、連日そんな仕事をしている、いや直属の上司である内閣参事官・多田智也（田中哲司）の命令によってそんな仕事を否応なしにさせられているとしたら、杉原の憤懣は？

■□■発端は一通のFAXから！吉岡記者の取材はどこに？■□■

私はモリカケ問題に関する国会でのやり取りのバカバカしさにイライラしていたが、『新聞記者』を書いた望月記者にとって、それは日本の政治のあり方を左右する重要な問題だったらしい。しかして、本作の吉岡記者が動き始めるのは、ある日東都新聞の社会部に「医療系大学の新設」に関する極秘公文書が匿名 FAX で送られてきたためだ。新設大学を認可するのは通常文科省だが、この医療系大学の新設の認可権者は文科省ではなく、内閣府らしい。また、何より奇妙なのは、その表紙。そこには羊の絵が描かれ、その眼はなぜか真っ黒に塗りつぶされていたが、その意味は？これは内部リーク？それとも、誤報を誘発さ

せるための畏？上司の陣野和正（北村有起哉）から、その FAX を託された吉岡は真相を突き詰めるべく取材を始めたが、その取材のターゲットはどこに？

本作を監督したのは『デアランドナイト』（19 年）で高い評価を受けた若手の藤井道人監督（『シネマ 43』318 頁）。タイトルにもなっている新聞記者に、韓国女優のシム・ウンギョンを起用したのが誰のアイデアかは知らないが、韓国人の彼女が全編日本語の本作で主役を張るのは大変。もっとも、本作の吉岡記者は父は日本人、母は韓国人、育ちはアメリカという多元的なアイデンティティを持ったキャラに設定されているから、それが面白い。本作の PRODUCTION NOTE によれば、東都新聞の記者たちが働くフロアは、千代田区内幸町にある東京新聞のフロアが使われたそうだが、その一員として働いている吉岡記者の言動は、同僚の関戸保（郭智博）らと比べると、明らかに異質。その異質性は、悪くいえば「協調性がない」、良くいえば「個性的で自己主張が強い」ということだ。そんな吉岡なればこそ、陣野はこの奇妙な FAX の解明を吉岡に命じたのだろう。

もちろん、その時点で吉岡は杉原との接点は全くなし。また、杉原が久しぶりに酒を飲み交わした、外務省時代の上司だった神崎俊尚（高橋和也）とも何の接点も無かったが、吉岡の取材のターゲットが神崎に向かった時、神崎は屋上から身を投げてしまうことに……。これは一体ナゼ？神崎は一体どこでどんな仕事をしていたの？そして、あの羊の FAX はひょっとして神崎から……。？

■□■俺たちは一体何を守ってきたんだろう？神崎の叫びは？■□■

「付度」という難しい言葉が急に有名になった「森友学園事件」の 1 つのポイントは、財務官僚による文書書き換え問題。それを巡って、近畿財務局職員と財務省理財局職員の 2 人が自殺するという悲劇も生まれた。

しかして、本作では 5 年ぶりに再会し、杉原の新人時代を懐かしみながらおいしい酒を飲み交わしたはずの、杉原の上司だった神崎がその数日後、ビルの屋上から飛び降り自殺をしてしまったから大変。彼は 5 年前にある不祥事の責任を 1 人で負わされて失脚し、今は内閣府に移って別の案件を担当していたが、なぜそんなことに……。？2 人が飲んでいた席で、彼が寂しげに語っていた気がかりな言葉が「俺たちは一体、何を守ってきたんだろうな」だったが、その心の叫びは、一体どこから出ていたのだろうか？

その神崎の葬儀の日、杉原は親しかった友人の一人として葬儀に出席したが、情け容赦のない新聞記者たちは、神崎の妻・伸子（西田尚美）や、娘の千佳（宮野陽名）に対して、「神崎さんはなぜ自殺したと思いますか？」等の心無い質問を投げつけていた。ところが、同じ新聞記者で、「同じ側」にいるはずの吉岡だけは 1 人「ここはそんな質問をすべき場所ではないでしょう！」とたしなめていたから、それを見ていた杉原はビックリ！そんな杉原に対して、吉岡は「私は神崎さんが亡くなった本当の理由が知りたいんです。」と語ったが、それは吉岡自身が神崎の娘である千佳と同じような境遇に置かれたことがあったため。

つまり、吉岡の父親はアメリカと日本の両方で活躍したジャーナリストだったが、ある政府絡みの不正融資について誤報を出した責任を追及され、自殺に追い込まれていたらしい。しかし、父の強さを誰よりも知る彼女はその経緯に疑念を持ち、今も真相を調べ続けていた。そして、それが日本で新聞記者の道を歩んだ大きな理由でもあったらしい。そんな境遇の新聞記者である吉岡は今、「神崎こそ情報のリーク元だったのでは？」と考えて懸命の取材を続けていた。

他方、杉原も官僚としての生き方を根底から揺さぶられていた。つまり、神崎の死後、杉原は内調が生前の彼をマークしており、自分だけが蚊帳の外に置かれていたことを知らされたから、アレレ。この内調はどこかおかしいのでは・・・？ひょっとして、尊敬する元上司の神崎は医療系大学の新設という名目のもとで何かを強いられていたのでは？彼が死に追い込まれるリスクを冒してまで止めたかったプロジェクトとは一体ナニ？杉原は今、そう考え始めていたが、そんな杉原の疑問と吉岡の取材が接点を持つのは、一体いつ、どこで、どんな形で・・・？

■□■そこまでやるか！東都新聞の一面トップは？■□■

『大統領の陰謀』でも『記者たち』でも、身体を張った主人公たちはかなりヤバイ、つまり、違法すれすれの取材(?)を敢行していたが、本作も杉原が、今は内閣府に勤務し、医療系大学新設の許可に関する仕事に従事している都築亮一(高橋努)の部屋で違法スレスレの取材(?)を敢行するので、それに注目！

本作では、官邸に不都合な事実をもみ消すためには民間人をおとし入れることも厭わない、杉原の直属の上司・多田の冷酷さが光っている。多田のもとには全ての情報が集まっているようだから、どこにどんな圧力をかければ、誰がどう凹むかもお見通しらしい。そのため、東都新聞のような小さな新聞社でも、朝日、読売、毎日並みの“忖度”が必要らしい。その結果、陣野は、吉岡が取材してきた、神崎や医療系大学の新設に関するネタをどこまで記事にすべきかを悩んでいた。その点は『記者たち』に見た、2人の記者たちの上司も同じだったはずで、明確なウラ(証拠)のない記事を公にできないのは当然だ。しかし、自分の部下の吉岡が内調に勤務する杉原と密接な連絡を取って、「羊のFAXの情報源は自殺した神崎に違いない」とアピールしたうえ、杉原は自分の実名を出すことも厭わないとまで明言したから、そこでやっとな陣野は記事にすることを決心。そんな“合意”の中で、違法スレスレの危険を冒してまで杉原が都築の部屋から取材した(盗み取った)情報とは一体ナニ？

そのネタをもとに必死に吉岡が書き上げた原稿に朱を入れるのは陣野だが、その時点では陣野もやる気満々！しかして、翌日の東都新聞の一面トップは、世間をあっと驚かせる記事になっていた。『記者たち』では、2人の記者たちが書いた記事は1社だけで孤立してしまっただが、なんと本作では東都新聞のこのトップ記事に対して、朝日、読売、毎日から

追加取材が来たというからすごい。もっとも、杉原が即座に多田の下に呼び出されたのは当然。そこで、多田は杉原に対していかなる質問と圧力を？そして、それに対して杉原は如何に？

■□東都新聞一面のトップ記事は？いくら何でもこりゃ？■□

私が高校生・大学生の頃に読んだ松本清張の政治ネタによる社会派ミステリーは、実に奥が深くドロドロしていて面白かった。その後も、その時代、時代に対応して政治に絡んだ面白い社会派ミステリーが登場していた。しかし、近時は TV でのアホバカバラエティが花ざかりとなり、ニュースも〇〇記者クラブ、△△記者クラブを窓口とした垂れ流し構造になってしまったため、画一的で横並びのニュースばかりになってきた。要するに、それだけ民主主義のレベルが低下してきたわけだ。

そんな中で 1 人の新聞記者が書いた小説を原案として制作された本作は、前半から中盤の展開を見ているとなかなかのもの。そう思いながら見ていたが、やっぱり『記者たち』のようなド迫力はなく、概ね想定される範囲での進行だから、近時の邦画のレベルは所詮こんなものだろうと考えていた。

しかし、私が心底驚かされたのは、東都新聞の一面トップを飾った記事を見たとき。それは、戦後 70 年間続いてきた平和に安住している今の日本では考えられない驚愕の事実だったからだ。朝日新聞を筆頭として懸命にマスコミと野党が追及してきたいわゆる“モリカケ問題”は、所詮“お友達内閣”や“忖度”レベルの問題だったが、このトップ記事は、それをはるかに越えた重大なもの。それをここでネタばらしすることはできないので、あなた自身の目で確認してもらいたいが、いくら何でもこりゃ今の日本ではありえないのでは？

■□結末は如何に？杉原の次のポストは？■□

本作を契機としてそれを論じてあまり意味がないが、私が大いに感心したのは藤井道人監督が今の日本でよくぞここまでの問題提起をしたということだ。ちなみに、本作の制作については、周囲に「これ、ヤバイですよ」「作ってはいけないんじゃないか」の声があったらしいから、それを乗り越えた制作陣は立派だ。もっとも、パンフレットによれば、藤井道人監督も“新聞を読まない世代”だから、オファーを受けた当初は政治や時事問題について詳しくない自分にこのテーマが扱えるだろうかと何度も迷ったらしい。

そんな本作の結末はかなり微妙だ。懸命の取材が実を結び、一面トップの記事が実現したことは、新聞記者である吉岡にとっては大きな喜びだが、もしそれが後に“誤報”だと糾弾されれば、吉岡も死亡した父親と同じ運命に・・・？他方、実名をさらすまでに至らなかったのは杉原にとって幸いだったが、多田たちの巻き返し工作が進めば、いずれ実名を出さざるを得ないことに・・・？そこまで行かなくても、たちまち多田に呼び出された今日、杉原の内調から外務省への復帰、転職、左遷は既に決定しているらしい。それでな

くても“官僚たたき”の風潮が進む中、かつてはエリート中のエリートとして学生たちの人気の的だった中央官僚になるための国家公務員試験受験者は減っているが、神崎の薫陶を受けて「公務員（中央官僚）は国家と国民に奉仕するのが仕事」と考え、懸命に働いている杉原のような官僚が職を失ってしまえば、更に官僚のなり手が少なくなるのでは？ましてや、杉原も神崎に続いて自殺してしまうような事態になると・・・？もちろん、本作はそんな結末を描いていないが、『孤狼の血』ではヒロダイ君と呼ばれる新米刑事役でシリーズ第2作の主演になろうと目をギラつかせていた俳優・松坂桃李の、本作ラストに見るいかにも悲しげな目が印象的だ。さあ、そんな本作の結末をあなたはどうか考える。

■□■力強い「宣言」をそのまま引用！■□■

本作のパンフレットには、原案・企画・製作・エグゼクティブ・プロデューサーである河村光庸氏の『映画』こそ真の自由であることを願って」と題する本作の「宣言」とも言うべき下記の文章が載っているので、本作評論では、最後にそれをそのまま引用しておく。

2019年、新しい元号「令和」が始まり、参議院選挙、翌年に控える東京オリンピックの開催。かつて経験したことのないような時代の大きなうねりの中で、人々はどこからどのような情報を得ていかなければならないのでしょうか。

第二次安倍政権の発足以降、下がり続ける「世界の報道の自由度ランキング」（国境なき記者団）で日本は2016年、2017年には連続72位と、ついにG7各国の中で最下位）となったことはすでにご承知かと思います。フェイクニュース、メディアの自主規制は蔓延し、官邸権力は平然と「報道の自由」を侵す……。この数年で起きている民主主義を踏みにじめるような官邸の横暴、忖度走る官僚たち、それを平然と見過ごす一部を除くテレビの報道メディア。最後の砦である新聞メディアでさえ、現政権の分断政策が功を奏し「権力の監視役」たる役目が薄まってきているという驚くべき異常事態が起きているのです。

それとともに、そしていつの間にか暗雲のように社会全体に立ち込める「同調圧力」は、人々を委縮させ「個」と「個」を分断し孤立化を煽っています。そのような状況下、正に「個」が集団に立ち向かうが如く、官邸に不都合な質問を發し続ける東京新聞の望月衣塑子さんの著書「新聞記者」に着想して、企画構想したのが映画『新聞記者』です。そしてこの数年日本で起きた現在進行形の政治事件をモデルにしたドラマがリアルに生々しく劇中で展開していくという映画史上初の試みとなる大胆不敵な政治サスペンス映画に着手しました。

「これ、ヤバいですよ。」「作ってはいけないんじゃないか」という同調圧力を感じつつの製作過程ではありましたが、映画『新聞記者』は完成しました。皆さま、この機会には是非この映画にお心を向けて下さい。「映画こそ自由な表現を」の旗を掲げ、ご覧頂いた皆さまのご意見ご感想を糧に、映画『新聞記者』は前人未到の道を進んでまいります。

2019（令和元）年7月4日記